

論文

## 障害とセクシュアリティの交差についての考察

——台湾の肢体障害／男性同性愛者の経験から——

欧陽珊珊\*

### 1 問題の所在

本稿は、台湾の LGBT 運動のなかで活躍している一人の肢体障害をもつ男性同性愛者への聞き取りを通じて、障害とセクシュアリティの交差を考察するものである。これまで東アジアの障害者に関する研究のなかで、あまり焦点を当ててこなかった障害のある性的少数者のことについて新たに注目する。

はじめに、障害研究や障害者運動における障害者の性をめぐる議論を整理しておく。障害に対するステレオタイプとして、無性愛または性的能力の欠如を挙げている。障害者のなかでも特に「依存している」と認識されている障害者は、幼児のように見られがちであり、その際、彼らのセクシュアリティは否定されることになる (Shakespeare et al. 1996)。大衆の想像力において、障害者の性は、しばしば不調和な何かとしてあり、その結果、障害者は無性化され、無性別化されることが指摘されている (McRuer and Mollow 2012)。こうした世の中のステレオタイプが、障害者を、性的生活から遠ざける方向に向かわせていることは想像に難くないだろう。1960年代から世界各地で始まった障害者運動に対しても、公的領域へのアクセスやそこでの権利獲得を優先し、私的領域で直面する問題を後回しにしてきたという批判がある (飯野 2020: 51)。ようやく 90年代から、フェミニズム運動や LGBT 運動が、「性の権利 (sexual rights)」、「性の政治」 (politics of sexuality) を強調したことにより、性の問題は人権の問題として捉えられるようになった。このような認識のもとで、近年、障害者の性の権利も議論されるようになったが、依然としてその議論は異性愛的な枠組みに縛られており、異性愛以外の多様なセクシュアリティは見落とされてしまう傾向にある。日本の例をあげるなら、脳性まひを抱える男性同性愛者である花田実は、障害学研究会関東部会第 18 回研究会でこう述べている。

これまでの障害者と性の課題は、この社会の前提としているヘテロセクシズムの上ののっかった形で展開している。障害者は恋愛や結婚は、一人の人間として当然であると主張してきた。この主張は、ある意味で正しいと言える。しかしそのことだけに目を向けてきたところに問題がある。何故なら、それは障害者がいかにしてヘテロセクシズムを権利として獲得するのか、といった話でしかないから。そのような一方的・一面的な見方ではなく、障害者がいかにしてヘテロセクシズムの陥穽にはまることなく自分らしい生き方を選択することができるのか、といった見方も必要だ (花田 2001)。

花田は、異性愛的な枠組みの強制に苦しむ障害者が存在することを示しているが、障害者の多様なセクシュアリティが無視されたままでは、単なるステレオタイプの問題であるだけに留まらず、異性愛規範に従っていない障害者をコミュニティから排除する行動にもつながるだろう。このような議論は、台湾の障害研究のなかでまだ詳しく

---

キーワード：障害のある性的少数者、セクシュアリティ、差別経験、複合的マイノリティ、インターセクション

\* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2018年度入学 公共領域  
日本学術振興会特別研究員(DC1)

研究されていないが、台湾の障害者権利に関する法制度の考察（梁 2015）によれば、障害者の婚姻と生殖のニーズを重視するべきであると言及されているが、異性愛的婚姻以外の可能性は検討されていない。

2000 年以後、欧米のフェミニズム、クィア理論、障害学において、障害とセクシュアル・マイノリティの交差（intersection）についての議論が展開された（McRuer 2006; Kafer 2013）。それらの議論によれば、異性愛と健常者であることが自然の摂理として仮装されている「正常性（normalcy）」は、障害学とクィア理論の両者に共通する問題意識である。健常主義（able-bodiedness）と異性愛主義（heterosexuality）の規範に強制される社会のなかで、障害とクィアは、このような正常視された規範から排除される逸脱的な存在である。障害のある性的少数者（LGBT persons with disabilities）は「多重な不利益（compounded disadvantage）」と呼ばれるものを経験し（Molloy et al. 2003）、複数の形態の差別を受けている。例えば、知的障害をもつ LGBT の人々はパターンリズム、異性愛規範、サービス提供者の偏見、家族の否定的な態度を受けているため、適切なケアや支援をもらっていない（McCann et al. 2015）。ろう者であるゲイはゲイのコミュニティと主流の異性愛者社会の両方から排除されることが多い（Sinecka 2008）。

こうした、これまでの研究や調査は欧米を中心になされてきた。それは、東アジアにおける障害者または性的少数者に関する研究や社会運動の展開が欧米より遅れており、障害のある性的少数者のことがまだ十分に注目されていないからである。しかし、「障害者がレズビアンやゲイのコミュニティから物理的・社会的障壁の組み合わせによって排除されているのも事実である」（Shakespeare et al. 1996: 159）という先行研究の指摘よりも、さらに進歩的な事実が台湾の LGBT 運動のなかで確認できる。90 年代から展開されてきた台湾の LGBT 運動は、「性の多様性」を求める社会的寛容の要求、性の解放や自分の性を選ぶ権利の要求、性的マイノリティの「制度化」への要求と異性愛規範への批判を行った（Huang 2011; 鈴木 2017）。こうした運動のなかで障害のある性的少数者の姿も初めて見られた。

肢体障害をもつ男性同性愛者である Vincent さんは、2008 年の第 6 回台北 LGBT パレードに、障害者の友人と一緒に「残酷児」<sup>1</sup>と書かれたフラッグを持ち、性的マイノリティを象徴する赤、橙、黄、緑、青、紫の 6 色で構成されたレインボーカラーの車椅子で参加し、講演をした。これは台湾で初めて、障害のある性的少数者が、自らの性的指向を開示し、カミングアウトをした事例である。同年に Vincent さんは「残酷児」という当事者団体を立ち上げ、2011 年から現在まで自助グループ活動、マイノリティ社会運動への参加も展開している。本稿は、Vincent さんのセクシュアリティの探求過程、差別の状況と、解放に向かう実践の試みを考察し、Vincent さんがいかに LGBT コミュニティに参加してきたのか、そのプロセスから見えてくる、障害とセクシュアリティの交差によって生じる複雑な問題と、その交差から生み出される可能性を明らかにしたい。

## 2 調査の概要

本稿では、筆者が 2018 年 7 月に日本で、2019 年 2 月に台湾でおこなったインタビュー調査を取り上げる。この調査は台湾における障害のある性的少数者の社会活動と運動実践を対象としている。当事者の活動団体である「残酷児」のリーダー、Vincent さんに 3 回、合計 7 時間のインタビューを実施した。インタビューは Vincent さんの生活歴を中心に、活動と社会運動に関する資料も参照しながら中国語でおこなった。その他、Vincent さんが中国語で書いた日記や記事、当事者活動の記録を、本人の承認を得たうえで二次資料として用いた。なお、本稿での引用文は、原文を筆者が翻訳したものである。次に、Vincent さんの生活歴の概要と人物像をまとめておく。

Vincent さんは、1960 年代にラオスの裕福な華人家庭の長男として生まれた。歩くようになった直後に急性灰白髄炎（ポリオ）に罹患し、両手は動かせるものの（左手は右手より動きにくい）、下肢の機能を喪失した。彼は、8 歳になるまで、6 人の子供をもつ母親に連れられて、ありとあらゆる治療を試したという。1975 年にインドシナ三国といわれるベトナム・ラオス・カンボジアが相次いで社会主義体制に移行すると、Vincent さん一家は台湾に移住し、そこで小学 5 年生から中学 3 年生までの 5 年間、障害者施設で過ごした。高校を卒業した後、家族に負担をかけないように、仕事を見つけ、自立生活を送るようになった。また、メディア放送の専門技術を習得し、新聞社とラジオ放送の仕事を経験していた。現在は台湾における LGBT 運動、障害者運動と関わるコミュニティに参加し、

マイノリティ社会運動のなかで活躍している。

### 3 考察

#### 3.1 無視された性

Vincent さんは、ポリオに罹患した後は身体の障害を治すことが生活の中心になり、健常者になることを期待され、小さい頃から「できる」ことを母親から厳しく要求されていたと述べた。

僕が生まれた家庭は、ラオスで結構お金持ちだった。家では兄弟たちのことは召使がしてくれるけど、僕だけが「自分でやりなさい」と母親から要求されていた。坊っちゃんであるはずの僕がなぜ自分でやらないといけないの？しかも身体の障害もあって、めちゃ大変！その頃の僕は、めちゃ怒っていたよ。大きくなるとだんだん母親の苦心が分かってきた。これは僕のための訓練だなと、いまの僕がなんでもまず自分でする習慣をその頃身に付けることができたと思った。

障害をもつ子供に「自立意識」をもたせようとする母親の努力が、Vincent さんに極めて大きな影響をおよぼした。29歳までの Vincent さんは「自立意識」をもって、健常者のように生活することを信念として頑張っていた。しかし、「健常者になる」と期待された Vincent さんであったが、性とは無関係であることが前提とされていた。

Vincent さんの経験によれば、まず家族の間に性に関する話題がそもそも存在しなかった。家庭以外の場面でも「自分は性と関係ないもの」と見なされていた。ひとつ例をあげると、Vincent さんは中学時代、思春期の男の子たちが身体の変化や性の悩みのお話で盛り上がっているとき、自分が近づくと、皆の話が急に止むという経験をしたという。「なぜこの話題に参加させてくれないの」と聞くと、みんなは「きみにはこの話はわからないし、必要もないだろう。きみにどう話をすればいいかもわからないんだ」と言われたという。

また、5年間を過ごした障害者施設では、性教育がなかったどころか、セクシュアリティに関する問題はタブー視されていた。しかし、Vincent さんにとって、「性の存在」は強く意識されるものであった。

施設には、いろいろな障害をもつ人がいる。ある部屋は左右が壁で、前と後が鉄柱で構成されていた。昔の「蒙古症」（ダウン症候群）と言われる人々は、この部屋で監視されていた。そのなかの一人の少年は、しばしば下半身を鉄柱にこすりつけていた。また、掃除と洗濯をするお婆さんがいると、少年は鉄柱に対する行為と同じように、下半身をお婆さんにこすりつけていた。

このような他人の行為を見ているだけではなく、Vincent さんは「性の啓蒙」を体験させられたこともある。

中学生になると、施設の同じ部屋に10人の男の子が住んでいた。時々、深夜、僕が寝ている時に、ある男の子が僕のベッドのところに来た。そして、その男の子は僕の性器を口に含んだ。僕にオーラルセックスをやらせた。そのときの僕は、この行為の意味がわからなかったけど、気持ちよさと快楽をよく覚えている。

「障害をもつ人々＝無性」と位置づけられた人は、性と無縁に生きることが望まれてきた（安積 2009）と指摘されているように、Vincent さんは、肢体障害をもつことで、無性、すなわち性がないというレッテルを貼られていた。しかし、性は隠れたものとして確かに存在し、施設で同性とのオーラルセックスも行っていた。

ジェンダー配慮で男女が隔離されている施設は、同性間での性的な空間になっていることを示している。そして、この空間内で人々は自分の性を自ら模索し他者に対して表す。一方、性教育の欠如により、このような性の模索と表出は、他者に対して暴力性と危険性を伴った行為となる恐れがある。Vincent さんは、オーラルセックスをさせられた経験に対して「気持ちよさと快楽をよく覚えている」と語っているが、性別にかかわらず、このような行動はときにトラウマを伴う性暴力である側面も存在することを決して看過することができない。

### 3.2 自らセクシュアリティを探求する

自分が性的存在ではないと思いきまされる障害者は、性欲を抑圧されている状態に置かれている。しかも、異性愛中心の社会構造のなかでは、異性愛者であるべきだとする周囲の期待に応えなければならない。やがて Vincent さんは社会人になると、女性と付き合うことになった。この経験について、彼はこう述べた。

25 歳から 29 歳の間、二人の女性と付き合うことになってしまった。一人目は、同僚の女性から告白されて付き合ったけど、誘惑されてもなにも反応がなかったので、この女性はタイプではないのかなと思って別れた。もう一人はいまでも親友だ。すごく綺麗な女性で、もし僕が異性愛の結婚をしたら、彼女は理想的なお嫁さんだと思った。しかし、そのとき一緒に遊びにいて、手を繋いで、同じベッドで寝ても、なにもしたくなかった。そのとき、母親の育ちと教育が素晴らしいものだったんだと思った。冗談で僕は柳下恵<sup>2</sup>だと言われる。

Vincent さんの語りによれば、彼は、女性と交際するときに、女性に対するマナーの正しきや性的衝動がないことは、ジェントルマンのような行動基準を要求した母親による良い教えのおかげだと認識していた。アジアの伝統的な家庭と同じように、彼は両親から性教育を受けることがなかった。性教育の欠如をふくめて、「直立者<sup>3</sup>のような仕事をする、生活をする、恋愛をする」という健全者になる信念をもたされていた Vincent さんは、自分は男だから女性と結婚するのがあたりまえであるとも考え、女性に対して性欲がないことを無視した。

29 歳までは、人生のすべてが障害に対する恐怖と不安に支配されていたので、自分の性的指向について考える余裕がなかった。そして、障害者であることを肯定的にとらえるようになってから、僕は同僚の男性が好きになったことに気付いた。障害のある自分を受け入れることの大変さと比べると、受け入れやすかったよ。けっこう楽だったよ。だって、同性愛であることは隠せるもん。からだの障害ってすぐにバレちゃうからね。障害を肯定するまで 29 年もかかったので、僕はもう時間を無駄にしたくないと思って、同性に性欲をもつことをすぐに受け入れた。ちなみに、それから、男に対する性欲もとんどん湧いてきた (笑)。

Vincent さんは障害をもつからだへの否定感を見つめ直し、「障害を肯定的にとらえるようになった」ことによって、自分のセクシュアリティについても自覚するようになった。この語りから、障害とセクシュアリティの関係性は複雑に絡んでいて、Vincent さんのアイデンティティに影響していることが読み取れる。

この後、Vincent さんは好きになったストレート（異性愛の男性）である同僚に告白したが、拒絶された。失恋のつらさを体験して、「僕がいくら頑張ってもストレートの男性が男に恋をしてくれないことが分かった。二度とストレートの男性には手を出さない」と誓った。しかし、どうすれば同じ同性愛者の男性と出会えるのかという問題は、Vincent さんの悩みの種であった。次節は「相手探し」の経験を考察する。

### 3.3 「相手探し」の辛さ

1990 年代初めの台湾社会は、同性愛に対してまだ保守的で、当時は「相手探し」の方法も非常に少なかった。特に、Vincent さんの周りにはカミングアウトしているゲイの友達もいなかったのも、自分で相手を探さねばならない状況にあった。

僕はテレビ週刊誌での友達探しのコラムに投稿したことはないけど、時々あのコラムを見て、投稿者が男性同性愛者かどうかがわかるよ。手紙で友達を作るという方法もあるけど、やり取りに時間がかかるね。早くしたいから、新公園に行こうと決心した。

Vincent さんが「全く知らない新世界」の生活に身を投じようとする時、「相手探し」の壁が目の前に現れた。

固定的なパートナーを持つまで、だいたい新公園に行くよ。特に2000年以前はインターネットや携帯通信が不便な状況で、相手探しやコミュニティへの参加は、今よりずっと大変だった。今なら、アプリで簡単にできるのね。

Vincentさんが語った「新公園」とは、「ハッテン場」のことだと思われる。「ハッテン場」に関する研究（石田2019）によれば、「ハッテン場」は「流用ハッテン場」と「専用ハッテン場」の二つに大別できる。前者は公園や公衆トイレ、クラブなど、男性同士の性交渉を目的としていない空間である。後者は、商業的に営業されている旅館やサウナである。本節は、Vincentさんが「流用ハッテン場」として利用していた公園および「専用ハッテン場」として利用していたサウナでの体験を取り上げる。

### 3.3.1 「新公園」

Vincentさんが最初に「相手探し」の場として訪れたのは、当時（1990年代）有名だった同性愛者をテーマとする白先勇の小説『孽子』で描かれていた「新公園」である。Vincentさんの経験を具体的に叙述する前に、「新公園」の背景と台湾のゲイ文化、LGBT社会運動におけるその位置付けについて整理しておく。

「新公園」とは、台北にある公園のことで、現在は「二二八和平紀念公園」と改称されている。台湾における同性愛者のライフストーリーの記録によれば、「新公園」が「ハッテン場」として機能していたのは、1950年代頃のことである。70年代から90年代中期まで、「新公園」は男性同性愛者の間で重要な社交空間として知られていた。1996年、当時台北市長だった陳水扁は、二・二八事件で犠牲となった台湾住民を追悼する記念碑を建立し、「新公園」の名称を「二二八和平紀念公園」に改めた。その前年に政府は「首都核心区規劃歷史保存計劃」を立ち上げた。これに対して数多くのLGBT団体が、「新公園」再建工事の計画は男性同性愛者の利用を排除する意図があると指摘した。そして、「LGBT空間行動陣線」という社会運動組織を設立し、「新公園」を台北のLGBT文化の一部として、また歴史的な記憶を共有する空間と位置づけ、保存すべきだと要求する運動を行った。

前述の白先勇の小説『孽子』（白1983=2006）のなかで、「新公園」は以下のように描写されている。

我々の王国には闇夜があるだけで、白昼はない。夜が明けるや、我々の王国はたちまち姿を隠す。極めて非合法的な国だからである。（中略）承認も受けていなければ、尊重されることもない。我々が持っているのは、単に烏合の衆の国民だけである。（中略）我々の王国の領域と言え、それはかわいそうなくらい狭い。せいぜい縦二、三百メートル、横百メートルばかり、台北市は館前路の新公園のなかにある、長方形の蓮池を囲む猫の額ほどの土地にすぎないのである（白1983=2006: 13）。

この小説で描かれているように、実際に夜になると男性同性愛者が蓮池の周辺をうろつき、性行為も含めたコミュニケーション活動を行っていた。1996年の公園改造計画の実施までは、「新公園」が多くの男性同性愛者にとって「出道」の場になっていたと指摘されている（馬2017）。「出道」とは、初めて「ゲイの世界」に身を投じるという比喩表現で、そのデビューとしての舞台が「新公園」だということである。

Vincentさんによれば、自分の「出道」は、「新公園」の外で待ち、そして「新公園」に入るという二段階であった。最初に、「新公園に入る勇気がなかった。障害を隠すために、公園の籬の外側に改装した車を止め、そのなかで待っていた」。閉園時間の24時になると、「公園から出た青年たちの姿を眺め、青年たちの匂いに誘われて、新公園の横にあるH街のあたりでうろろろしていた。時々、声をかけて来る人もいた」とVincentさんは述べる。

この同性愛者の王国が僕のことを受け入れるか。あんなにおしゃれで、自信満々のイケメンたちの前に、三十歳で醜い身体を持っている僕は、車から出る勇気がなった。なので、いつも車のなかに座って、足のキャリパーを外して、松葉杖と一緒に後ろに隠した。男たちは、僕が障害者であることに気付かず車に入ってくる。しかし、僕の体を触ると、彼らは僕の足が変になっていることがすぐ分かる。

時に、何も言わずにやった後すぐに車から出ていく人がいる。あるいは、終わった後で、「きみ、かわいそう

だね。足がこんなことになってしまっただけ」と言う人もいる。また、僕の足を触って逃げた人もいる。そのとき、僕は彼氏が欲しかったが、出会いはすべて ONS だった。

このように車のなかで成立したセックスは ONS (ワン・ナイト・スタンド) で、Vincent さんは、熱望していた男性との恋愛関係を結ぶことができなかった。外見上の身体障害を隠すことはできるけれども、相手が車内に入ってくると、足が不自由なことがばれる。「かわいそう」と相手によく言われ、楽しい性愛だと言えない場合が多かった。「セックスのために相手を欺いているように思える」と考えた Vincent さんは、H 街によく来る D さんと友だちになり、D さんが「新公園」内の事情をいろいろ教えてくれたことで、「新公園」の外で消極的に待つだけの行動をやめ、なかに入ることを決意した。その出会いについて、Vincent さんは「追愛無障礙：拐進了新公園」(残 2016a) に記録している。

一人の青年が僕のほうに歩いて来た ……

「えっと …… きみは足にけがをしたの？」やっとなを掛けてくれたが、この青年とは話をしないほうがよかったと思った。

「ううん、けがではないよ。僕が生まれた頃はポリオが流行して ……」と僕は真面目に答えたが、青年の身体を触りたくなっている。

「かわいそうに！セックスができなくなってしまったんだね！」と青年が言う。

なんだって！僕はこの言葉に驚愕した！なんで僕がセックスができないと勝手に決めつけているの？セックスはもちろんできるよ。僕は“1”〔挿入する側〕なんだよ！と弁解しようと思ったが、青年はさっさと僕のそばから離れて行った。

このような経験が何度もあった。正直、僕の容姿が醜いからセックスをしたくないと思われたのなら、これは残念だけどしょうがない。しかし、セックスができないと判断されるのは本当に許せない。これは侮辱だ！こういうとき、反撃として僕は相手を挑発するように「信じてないなら、やってみようよ！」と言うけれど、相手は何もかも冗談と受け取って笑うだけだ。

Vincent さんは、好みの問題でセックスを拒否されるのは理解できるが、足の障害を理由にセックスができないと判断されるのは侮辱だと感じた。また、想像もつかないような、答えられない質問をされることもあったという。

新公園で僕がナンパしたある男性にこう聞かれた。「障害のせいで、女性は誰もきみと結婚しないから、同性愛になったんだろう？」

「僕たちがこうしているのは、きみとセックスをしてくれる女性がいなかったからなの？」と僕は答えた。

「障害のせいで結婚できないから同性愛者になったの？」と聞かれたこともある。同性愛者からこんなふう聞かれることはあまりないが、異性愛者はよくこういう質問をする。

みんなが僕に“同性愛者になった理由”を聞きたがるのはなぜだろう？僕に対する好意的な関心と考えられるものなのか？あるいは、彼らが期待している異性愛の障害者像と僕がずれていただけなのか？

このような質問は、交差性的差別の一つの形態を表している。Vincent さんは、人々がもつステレオタイプである「異性愛である障害者」「健常な同性愛者」から逸脱したものとしてみられている。そして、特定の理由がないとその場（同性愛的セクシュアルな空間）にはいけない存在とされる。このような理由を尋ねることは、Vincent さんが障害をもつことで、「ゲイ」という集合的なカテゴリへの参加が拒否されたことを示している。言い換えれば、複数のマイノリティに同時に属する状況になると、どちらのコミュニティにも属することができなくなってしまうのである。

ところで、Vincent さんは「新公園」で障害者に対する嫌悪感と同情を強く受けていた一方、ここでの他の男性同性愛者との交流を通じて、ゲイコミュニティの状況も知り、インタビューによれば、Vincent さんは「新公園」

で同性の間の性的コミュニケーションができて、彼氏もできた経験もあった。このような経験は、Vincent さんの自ら性を解放する実践が「流行ハッテン場」で実現したことを示している。

### 3.3.2 「三温暖」

ここからは、ゲイの文化においても一つ重要な場所である「三温暖」での Vincent さんの体験を考察する。台湾において、中国語で「三温暖」と表記されるものは、休憩できるサウナのことである。台湾のサウナはだいたい男性専用に限られている。一定の利用料金を支払うと、大きなサイズのロッカーに服や貴重品を預け、シャワーと大浴場、そしてサウナの利用ができる。また公共休憩室があり、店によっては仮眠用の個室も提供される。

Vincent さんは「新公園」の人々から、1980～90年代に男性同性愛者にとって最も人気のあった「大番三温暖」のことを教えられた。「大番三温暖」は台北の西門町(日本でいう東京の新宿二丁目のような、有名なゲイコミュニケーションの地域)にあるゲイサウナである。Vincent さんは心を決めて、足のキャリパーを外し、松葉杖だけで「三温暖への冒険」に行った。「大番三温暖」での体験を Vincent さんはブログに記録している。以下の引用は「追愛無障礙：大番三温暖的慾起慾滅」(残 2016b)からのものである。

なにがなんでもやる！入場料を払ってからタオルをもらおうと、更衣室に直行した。何も考えずに服を脱ぎ、隣に裸の男の子がいても、ちらっとみる勇気がなかった。自分の「鳥の足」を白い毛布にくるんで、松葉杖で支え、まずシャワールームに向かって移動する。好奇心をおさえ、あたりをチラチラみないようにしているが、周りから奇妙な熱い目を向けられていると感じた。おそらく誰も僕のことを見たくないはず、自分の心のなかで呪っているだけ！（中略）

シャワーが終わり、サウナルームに入ろうと思ってドアを開けて小さな一步を踏み出そうとすると、床が滑りやすいことを知らず、転倒してしまった。地面に身体をぶつける音だけでなく、松葉杖が倒れて落ちる音もして、思わず叫んでしまうような大騒ぎになった……誰かが駆けつけてきて「どうしたんですか？大丈夫ですか？」と尋ねた。「大丈夫、松葉杖が床に落ちただけで、大丈夫だ」と痛みを我慢して何もなかったふうに答えた。あ！まずい、急なことで焦ったせいで、松葉杖のことを言ってしまった……人々が次々とサウナルームに入って来たが、誰も僕の体を触ってくれなかった。寂しいなあ。それを全部僕の「兄弟」(つまり、一生付き合っていかなければならない松葉杖！)のせいにした。

小さな赤いライトに照らされている通路は、肉体の森のなかで、僕の松葉杖のための小径のようだ。エロ小説に描かれた場面と全然ちがいが、通路を挟んでいる肉体を慰める手が、僕の身体には当たらない。結局のところ、僕が感じたのは、僕は目に見えない存在としてその通路に浮いていたということだ。僕の身体には、誰の指紋も残されていなかった……

彼は終始無言だった。「ありがとう」と僕が言った後、彼は立ち上がり、ドアを開けて出て行った。年を取っている彼の輪郭をはっきりと覚えている。そもそも性愛は情熱的でお互いに楽しみを得るものであるはずなのに、なぜ僕の場合になると、結局感謝の心を抱えなければならないのだろうか。しかも、なぜ好きかどうかと関係なく(行為を)受けるしかないと決められているの？僕はそれを完全に受け入れなければならないの？心も身体も満足せずに、「大番三温暖」から逃げ出した。五体満足でセックスをする相手を見つけるのはとても難しい！

この引用から、Vincent さんが性欲と性行動を遂行する主体になって性を解放する上での障壁は「物理的バリア」と「文化的バリア」であるということを読み取ることができる。物理的には、バリアフリー化されていない「専用ハッテン場」の環境によって、身体障害者が排除されている。文化的には、主流のゲイカルチャーから欠損した身体が排除されている。Vincent さんが、欠損した身体に対するセルフスティグマを克服し、積極的に性的コミュニケーションに参加したとしても、サウナで他の人と対面すると、しばらくセックスに対する自己決定を奪いとられた状態に置かれ、障害者差別の内面化を強化されてしまうのである。

ここまで、Vincent さんの「ハッテン場」での経験を考察した。当時夜の「新公園」がゲイの「ハッテン場」と

して機能していることは、社会から不名誉なことだと汚名を着せられていた。また、サウナという「専用ハッテン場」より、性交渉のために公園でのコミュニケーション活動を行うこと自体が、ゲイコミュニティ内部から蔑視されていた（呉 1998）という指摘もある。Vincent さんは障害者であるために他の人とは異なる経験をすることによって、先行研究で明らかになっているこのような二重の差別がある状況のなかで、ゲイコミュニティ内部にさらに存在する障害者に対する差別を見出すことになった。

### 3.4 社会活動への参加

Vincent さんにとって、「ハッテン場」での経験は、その後の社会活動の参加に大きな影響を与えた。「ハッテン場」という多重差別が存在する空間は、性的抑圧を解放するための重要な場所であり、長年の障害者としての孤独が解消された場所でもある。

ここで孤独が解消されたというのは、はじめて「新公園」で同じく障害をもつ同性愛者と出会ったという意味である。

初めの人、僕と同じように松葉杖を使って公園の東屋に立っていた。新公園での“生き残り”経験で、僕は Gay Dar という技能を身につけた。Gay Dar というのは、相手をよく観察しなくても、ちらっと見ただけでゲイなのかそうではないのかがすぐわかる能力だ（笑）。

彼を見つけた瞬間、僕はとても嬉しかった。家族と同じような親近感を覚えた。そして、僕ができる限りのスピードを出して彼のほうに走ろうとしたら、彼も僕のこと気づいた。そうしたらどうだ。彼は急いで逃げはじめた。彼は足が長くて松葉杖も長いから、彼に追いつくことができなかった。それ以後、二度と彼と会うことはなかった。僕は単に彼と話がしたかっただけで、びっくりさせるつもりはなかった。でも、出会ってよかったと思った。少なくとも、この世に障害のある同性愛者は僕一人だけではないことが分かった。

Vincent さんによれば、他の人に「あなたは一人ではないというメッセージを伝えることは、他の人にとっても、自分にとっても強い力になる」ということを認識するきっかけになったのは、「新公園」での同じく障害のある同性愛者とのこの出会いであった。

また、「もう一人は僕にとってすごく重要だ。この出会いを通じて、いろいろと考えさせられた」と Vincent さんは述べている。その出会いとは、脳性まひをもつ男性との経験である。

突然、一人の男性が僕のほうにゆっくり歩いてきた。めちゃ嬉しいと思って、東屋（新公園のなかの亭）の柱によりかかって立つようにした。近くに来ると、彼は不自然な歩き方をしている、口からよだれが流れ続けていた。あ、もしかして彼は脳性まひだろうか。そのときの僕は、脳性まひの人とやり取りしたこともなかったので、完全に圧倒された。彼はいきなり僕の生殖器を触ってきた。僕は拒否しようと思って、「やめて」と言いたかったけど、言葉を口に出さなかった。

そのとき「拒否」するのをやめたのは、これまで自分が何度も拒否された経験があるからだ。今回、もし僕が彼を拒否したら、自分が、障害のある僕をいつも拒否した人と同じようになってしまわないか。拒否されたときの辛さ、悲しみは、僕が一番分かっているのに。でも、彼は僕のタイプではないから、ほんとはこういう行為をしたくないんだけど……彼の僕に対する行為を、やめさせたくないのではなく、やめさせられないのだ。僕自身が彼と同じ当事者だから。あの日、なによりもわびしさを感じた。そのわびしさがいまでも続いている。

性的コミュニケーションでよく「相手の拒否」を受けていた Vincent さんは、自分と異なる障害をもつ相手と対面したとき、その人を拒否できなかった。理由の一つは、同じく障害者として「拒否されたときの辛さ、悲しみ」をよく理解し、その人に共感すればするほど正しい選択が分からなくなってしまったことである。相手を拒否すると、自分も差別する側になってしまう。しかし、拒否しないと自分の意志に反することになる。Vincent さんにとって、



差別をする側と差別を受ける側の境界線が曖昧になった。

このような他者と対面することは、新たな考えを生み出した。Vincent さんはこう述べている。

台湾では、長い間障害者の性をめぐる議論が展開されていなかった。その妨げになっているのは、「わからない」ことである。性は、台湾の文化においてプライベートなものだ。性のことを話すのは恥ずかしい行為であり、それは口にはできない話題だ。みんなそう教育されていた。だから、障害者の親や、周りの人たちは、実際に障害者本人の性のことがわからない。何をしてあげればいいのかもわからない。わからないから、知らないふりをする。障害者本人も、自分の性について語らない。結局、悪循環に陥ってしまった。

その後、Vincent さんは自分のセクシュアリティ、性的な抑圧や差別に直面した経験を、LGBT 団体や障害者団体、多様な性教育プロジェクトを行う学校などで、ブログや講演会の形で伝えた。また、『真情酷兒』（偽りのないクィア）という Vincent さんが DJ をしていたラジオ番組で同性愛者であることと障害者としての体験を交差させた経験をリスナーに伝えていた。Vincent さんは社会活動への参加についてこう語った。

わたしたちは自ら声をあげ、自ら主張しないと、他者が何かをわたしたちにしてくれるまで待っても、期待できないからだ。他者がわたしたちのために何かをしてあげたいと思っても、何をすればよいかわからない。だから、わたしたちがまず自分の存在を他者に示すことから始めねばならない。

ある講演で Vincent さんは、33 さんという手の不自由なアメリカで障害研究をする学者からアドバイスをもらった。

33 さんと仲良くなってから、彼女からアメリカの障害者運動や障害のある性的少数者のことを教えてもらった。2007 年の頃、33 さんからこう言われた。

「あなたは身障同志<sup>5</sup>なのに、なぜ自分のコミュニティのためになにもしていないのですか。今度身障同志のために声を出してみませんか」彼女はちょっと僕のことには不満を持っているようだった。

「僕は、何をすればよいのか？」と僕が彼女に意見を聞く。

「今年は角落咖啡劇場<sup>4</sup>の世話人が障害者が外に出かけるイベントを企画したそうですよ。まずはわたしたちも参加してみてもどうでしょう？」と 33 さんが提案した。

そしてわたしたちは角落のイベントに参加した。中正記念堂のあたりでパレードをするような、とても素晴らしい活動だった。この活動への参加は僕の心に種をまいたと思う。

「一緒に身障同志のグループを作って、今年の台北 LGBT レインボープライドで歩きませんか」と次の年に 33 さんから誘われた。

「他の身障同志がどこにいるのかわからないし、昔の新公園で二人と出会ったことはあるけど、連絡が全然取れていない。どうしよう？」と僕はちょっと心配していた。

「大丈夫ですよ。同志じゃなくても、私のような異性愛者でもよいでしょう。当事者に限らず、身障同志を応援したい人々なら」と 33 さんが答えた。

友だちが一緒に居てくれれば僕もやる気が出た。

そして、Vincent さんは、33 さんの影響で、それまではラジオというメディアを介し、見えない場所で発言していたが、パレードやイベントに目に見えるかたちで参加するようになり、いわば生きられた (lived) 「身障同志」として表に出ることとなった。自分が自分のコミュニティのために何ができるか、居場所はどこにあるのかについて考えるようになった。その結果、Vincent さんは前述した LGBT パレードへの参加をはじめ、同性婚支持運動も参加し、「残酷児 (Disabled Queer)」という自助グループを立ち上げ、多様な活動を企画した。さらに LGBT 運動のなかで出会った仲間たちとともに、障害者の性の解放のために「手天使 (Hand Angels)」という障害者に対する性

的介助のボランティア団体も発足させた。

#### 4 結論

本稿では、障害とセクシュアル・マイノリティの交差について、台湾のLGBT運動に参加してきた肢体障害をもつ男性同性愛者である Vincent さんの経験から考察した。

Vincent さんの語りから明らかになったのは、第一に、身体障害者が自らのセクシュアリティを自覚するまでに多重の障壁があり、性行動の主体になる上で多くの困難が存在することである。「健常者ではない身体をもつ人間」を「障害者」にしていくのは、社会や文化であり（稲原 2020: 156）、障害者もまた、自らを性的存在ではないと思いつくことによって性欲が抑圧された状態に置かれることになる。しかも、異性愛中心の社会構造のなかでは、障害者のセクシュアリティが問題になる時、異性愛でなくとも、異性愛者としてふるまわなければならない。Vincent さんも、自分の性的指向を自覚するまで、「異性愛の障害者になる」という過程をくりぬけてきた。

第二に、身体障害をもつ男性同性愛者としての Vincent さんは、性的抑圧を解放しようとする時、「物理的バリア」<sup>6</sup>と「文化的バリア」に直面し、多重の差別を受けることになる。Vincent さんのハッテン場の経験から、「新公園」やサウナなどで形成されているゲイのコミュニティの内部において、身体障害者は、「健常」な文化規範が主流のゲイカルチャーから周縁化され、排除されていることが明らかになった。

第三に、Vincent さんはどのように「交差性」と向き合うかということについて考察してきた。「健常性とヘテロセクシュアリティが相互に絡み合いながら規範化した社会」（McRuer 2006: 2）が生み出す「健常な異性愛的身体」という規範構造の中で、障害をもつと同時に同性愛である Vincent さんは、交差的な差別と排除を受けていた経験に基づき、社会活動に参加しようとした。特に、Vincent さんはゲイのコミュニティの内部から受けた障害者差別の経験を強調し、LGBT 社会運動への参加により社会的にカミングアウトすることで、これまでコミュニティのなかで省略されていた障害のある性的少数者としての声をあげるようになったことが明らかになった。Vincent さんの活動は、障害者のセクシュアリティの多様性を提示し、「差異」を可視化することによって、ゲイコミュニティのなかで健常者中心に構築された文化や既存のセクシュアル規範を攪乱しようとしている。

交差性（intersectionality）とは、ひとつの要素で差別的状況を把握し特定しようとするのが、常に大きな見落としを伴っていることに注意を喚起するための視点であり（飯野 2016: 184）、交差性を重視することでより多重的な差別や排除の複雑な問題が浮かび上がってくる（Crenshaw 1991; Collins 2016）。そして、こうした複雑な交差的差別や排除の構造をほぐすため、Kafer は「障害者運動とフェミニズム運動、LGBT 運動の共同実践が不可欠である」と提案した（Kafer 2013: 149-69）。ここで言及した「共同実践」を探求するために、その「差異」をひとつずつ丁寧に洞察していく必要がある。本稿において、ゲイコミュニティにおける障害をもつゲイに対しての差別と排除の事例を提示したように、複数のマイノリティの交差的経験を顕在化することにより、マイノリティ内部のさらなるマイノリティに対しての差別と排除の存在が明らかとなる。このような実践においては、いかに既存のコミュニティ規範が問い直され、立て直される契機になるのかについて検証されることが望まれる。そこから差別や排除の構造をほぐすための可能性について、今後の研究で深めていきたい。

最後に、本稿の限界を検討する。本稿では一人の肢体障害をもつ男性同性愛者の経験を考察したものであり、障害のある性的少数者といっても均質なものではない。例えば、男性同性愛者、女性同性愛者、トランスジェンダーとでは、経験が異なるという。また、障害の種類と状況によって、経験が異なるということもある。そして、本稿のなかで「交差性」という用語が用いられていたが、今回の論考はジェンダーの視点からの分析が不足している。今後、こうした障害とセクシュアリティとジェンダーの交差についての考察が必要である。

【謝辞】 本研究の調査にご協力頂く皆様に感謝申し上げます。本稿は JSPS 特別研究員奨励費（JP20J21415）による研究成果の一部であり、また立命館大学生存学研究所 2018 年度若手研究者研究力強化型「国際的研究活動」を受けて実施しました。

[注]

- 1 「残酷児」とは障害者であり、性的少数者であるという交差した状況を表わしている。中国語で「残」は完全なものに傷をつけるという意味で障害を表す。「残酷」は悲惨、むごいことを表す。「酷」はクール、カッコイイという意味であり、そして「酷児」というのは Queer の翻訳である。この四つの意味をあわせて、交差させたアイデアである。
- 2 柳下恵は周王朝時代の魯国の賢者として「座懐不乱」という美談がある。ある嵐の夜、隣の未亡人の家が吹き飛ばされてしまった。寒さに震える未亡人をみて、柳下恵は彼女を足の間に座らせ暖を取らせたが、彼の心は少しも乱れなかったという。
- 3 直立者とは、直立して二足歩行ができる人々に対する Vincent さんの呼び方。
- 4 1999年に成立された角落咖啡劇場は障害者が安心して仕事をする場所として運営されている。
- 5 台湾では障害者のことを“身心障礙者”と呼び、同性愛者のことを“同志”と呼ぶ。会話のなか「身障同志」という言葉は障害のある / をもつ同性愛者のことを意味する。
- 6 詳しくは Shakespeare et al (1996)、倉本智明 (2005)、飯野由里子 (2020) を参照。ここでは、障害者の性の領域における物理的バリアの問題について議論がなされている。

[文献]

- 安積遊歩, 2009, 「癒しのセクシー・トリップ」天野正子ほか編集委員『セクシュアリティ (新編日本のフェミニズム 6)』岩波書店, 83-8.
- 白先勇, 1983, 『孽子』遠景出版 (= 2006, 陳正靚訳『孽子』国書刊行会).
- 残酷禪 (= Vincent), 2016a, 「追愛無障礙——一番三溫暖の慾起慾滅」, AGE OF QUEER, 2016年8月19日, (2019年11月24日取得, <http://ageofqueer.com/archives/11780>)
- , 2016b, 「追愛無障礙——拐進了新公園」, AGE OF QUEER, 2016年4月14日, (2019年11月24日取得, <http://ageofqueer.com/archives/9478>)
- 鄭揚宜, 2017, 「智能障礙者性權研究」台湾國立中央大學哲學研究所博士論文.
- Collins, Patricia H. and Sirma Bilge, 2016, *Intersectionality*, Polity Press.
- Crenshaw, Kimberle, 1991, "Mapping the Margins: Intersectionality, Identity Politics, and Violence against Women of Color," *Stanford Law Review*, 43 (6): 1241-99.
- Kafer, Alison, 2013, *Feminist, Queer, Crip*, Indiana University Press.
- 倉本智明編, 2005, 『セクシュアリティの障害学』明石書店.
- 梁美榮, 2015, 「我國身心障礙者性權之省思」『社區發展季刊』149: 81-90.
- 花田実, 2001, 「セクシュアル・マイノリティ——特に障害を持つゲイから見た社会」障害学研究会関東部会第18回研究会.
- Huang, Tao-Ming, 2011, *Queer Politics and Sexual Modernity in Taiwan*, Hong Kong University Press.
- 稲原美苗, 2020, 「障害はどのような経験なのか——生きづらさのフェミニスト現象学」稲原美苗・川崎唯史・中澤瞳・宮原優編『フェミニスト現象学入門』ナカニシヤ出版, 155-66.
- 飯野由里子, 2016, 「多様な差異を踏まえた合理的配慮」川島聡・飯野由里子・西倉実季・星加良司『合理的配慮』有斐閣, 181-94.
- , 2020, 「『省略』という抵抗——障害者の性の権利と交差性」『思想』1151: 52-69.
- 石田仁, 2020, 「ハッテン場」綾部六郎・池田弘乃編『クィアと法』日本評論社, 75-110.
- 馬翊航, 2017, 「往樂園の夜航船——二二八公園」喀飛編『以進大同』台北: 文訊雜誌社, 20-5.
- McRuer, Robert, 2006, *Crip Theory: Cultural Signs of Queerness and Disability*, NYU Press.
- McRuer, Robert and Anna Mollow, 2012, *Sex and Disability*. Duke University Press.
- McCann, E., Lee, R. and Brown, M., 2015, "The experiences and support needs of people with intellectual disabilities who identify as LGBT: A review of the literature," *Research in Developmental Disabilities*, 57:39-53
- Molly, D., Knight, T. and Woodfield, K., 2003, "Diversity in disability: Exploring the interactions between disability, ethnicity, age, gender and sexuality," *Research Report No.188*, Department for Work and Pensions, Leeds.
- Shakespeare, Tom, Kath Gillespie-Sells and Dominic Davies, 1996, *The Sexual Politics of Disability*, London and New York: Cassell.
- Shakespeare, Tom, 2013, *Disability rights and wrongs revisited*. Routledge.
- Sinecka, Jitka, 2008, "I am bodied'. I am sexual'. I am human'. Experiencing deafness and gayness: a story of young man," *Disability & Society*, 23 (5): 475-84.
- 鈴木賢, 2017, 「台湾における性的マイノリティ『制度化』の進展と展望」『比較法研究』78: 231-46.

吳瑞元, 1998, 「孽子的印記——臺灣近代男性『同性戀』的浮現 (1970-1990)」台灣國立中央大學歷史研究所碩士論文.

## Exploring the Intersection of Disability and Sexuality from The Experience of a Gay Man with Physical Disabilities in Taiwan

OUYANG Shanshan

### Abstract:

This article explores issues of discrimination against sexuality, which persons with disabilities identifying themselves as sexual minorities have experienced, in order to show positive perspectives attained through their experiences at the intersection of double minorities such as disabilities and sexualities. After the 1990s, multiple types of discrimination against people who were lesbian, gay, bisexual and transgender (LGBT) especially with disabilities have been discussed in the West. Yet many Asian countries are not aware of those issues. This study focuses on a gay man with physical disabilities, who is a Taiwan-based LGBT activist, by interviewing him for understanding how he discovered his sexual orientation, experienced different discriminations even in a gay community, and finally came out in the whole LGBT community of Taiwan. The result illustrates the process that a person with multiple minorities started a social movement for advocating the status as part of one's personal uniqueness, triggered by his experiences of discrimination that he incurred in the gay community. The research concludes his actions as a pioneering attempt not only to reconsider general views of disability and homosexuality but also to uncover internally-underlying inequality in a minority community, which is hardly visible in society.

Keywords: LGBT people with disabilities, sexuality, internal discrimination, multiple minorities, intersectionality

## 障害とセクシュアリティの交差についての考察 ——台湾の肢体障害／男性同性愛者の経験から——

欧 陽 珊 珊

### 要旨：

本稿は、障害とセクシュアル・マイノリティの交差によって生じる問題と、その交差から生み出される可能性を明らかにすることを目的とする。台湾の肢体障害をもつ男性同性愛者である Vincent さんへのインタビューから、そのセクシュアリティの探求過程、重層的な差別の状況と、そこからの解放実践を考察した。考察により障害者である Vincent さんが性的主体になるには多重の障壁が存在すること、また、健常中心的な文化規範のゲイカルチャーから周縁化されるという、交差から生じる問題を明らかにした。さらに、Vincent さんが障害のある性的少数者としてカミングアウトし、LGBT 運動に参加することで、「障害」を「差異」として強調する運動を起こした経緯を明らかにした。結論として、複数のマイノリティ性に属す Vincent さんの実践は、障害者の性の多様性を提示し、マイノリティ内部に存在する差別と排除問題を顕在化させ、既存規範を攪乱しようとする試みとして位置づけられる。

